

## プロローグ 破滅と墮落の幕開け

ある城の舞踏会場で、私はこの世の春を謳歌していた。

煌びやかなシャンデリアが舞踏会場全体を照らし出し、楽団が奏でる優雅な旋律に合わせ、男女が軽やかに舞う。私の隣には、完璧な笑みを浮かべた婚約者。この幸せが永遠に続くのだと、私は愚かにも信じ込んでいた。

「皆様、ご注目ください！」

婚約者の声が、突如、場に響いた。視線が一斉に私たちへと集まる。

なんででしょう？ 紹介して下さるのかしら？ 嬉しい……。

そんな風に気楽に思っていた私。だけど、その視線が一瞬鋭く光るのを見た。そして彼は私の手を、まるで汚いものでも払うかのように無造作に振り払う。

えっ！

さらに彼は信じがたいことを、声高らかに叫んだ。

「本日をもって、私は、このエルンスト伯爵令嬢との婚約を破棄する」

一瞬にして、時間が止まった。ざわめきが、遠くで響く。

どういうこと？　なぜ？　そんな事を言うの？

耳鳴りのように反響する人々の声に、私は呆然と彼を見上げる。

「な、何を仰っているのですか……？」

だが、彼の瞳に映っていたのは、私を突き放す冷徹な光だけだった。

「お前はもはや、当家の妻になるには相応しくない。家は没落し、礼儀も品位も欠けている。そんな女を、我が家の未来を担う妻にするわけにはいかない」

胸を刃で切り裂かれたような衝撃が走る。周囲の令嬢たちが扇で口元を覆い、

貴族たちの冷笑が容赦なく浴びせられた。笑いと嘲り、そして憐れみの視線。そのすべてが、私の肌を刺し貫いていく。

「そ、そんな……どうして」

かすれた声は、誰の耳にも届かない。彼は眉をひそめ、冷淡に言い捨てた。

「君には、もう用はない。……出ていけ」

その言葉とともに、私の世界は音を立てて崩れ落ちていく。

なぜ？

全く見当もつかなかった。伯爵令嬢としての、礼儀作法は完璧だったはず、私に落ち度があるとは思えなかった。

「お待ちください！」

「しつこいぞ！ 直ぐに出て行け！」

衛兵がやってきて私を囲み、抵抗する事も出来ずに屋敷を追い出される。

突然の事に迎えの馬車もおらず、私は途方に暮れてドレス姿のまま歩いて行く。

うそ……なんで。そんな……どういう事？

全く理由が分からないままに、家に戻ると伯爵である父が帰りを待っていた。

今日、起きた出来事をそのまま伝えると、お父様は、こう答えた。

「すまない……私のせいだ」

「そんな……お父様……」

擁護して下さると思っていた。それなのに期待する答えを言ってはくれない。それから父は黙り、自分の部屋に戻って行ってしまう。意味が分からなかった。私は仕方なく部屋に戻って、ベッドに飛び込んで泣くしか手だてがなかった。

「ううう、お母さま……お母様はどこに……」

そのまま泣きながら、私は理不尽な仕打ちに打ちのめされていたのだった。

そして……。

舞踏会での婚約破棄から数日後、私の家エルンスト伯爵家は一気に没落した。父の事業が失敗、屋敷は差し押さえられ、借金の取り立てが日ごと押し寄せる。あれほど誇り高かった母は、もはや病床に伏し、私はただ、無力に立ち尽くすことしかできなかった。

これ……だったのか。

やっと婚約破棄の理由を知る。既にこの事は社交界に出回っていたのである。それを察知し、婚約者は私をお捨てになったのだ。もう既に決まっていたこと。

そして、最悪の知らせが届いたのは、ある朝だった。

「お嬢様……借金肩代わりとして、あなたは引き渡されることになりました」

「えっ、嘘……」

「申し訳ございません」

古くから仕えてくれていた執事が、震える声で告げてくる。その隣には、黒い外套を羽織った見知らぬ男。獲物を値踏みするような、獣じみた視線で、私を上から下まで舐め回す。執事がただ申し訳なさそうに、俯くだけだった。

「……これが噂の令嬢か。偉い別嬪だな。貴族の娘なら調教のしがいもある」



奴隷商人だ、と直感した。血の気が引き、全身が震えた。

「や、やめて……私は……っ」

声は掠れて、情けないほど小さくしか出ない。奴隷商の男は鼻で笑い、私の顎を荒々しく掴んだ。

「お、おやめください！」

執事が言うが、奴隷商にドン！と胸を押される。

「こいつは、もう貴族じゃない。ただの負債だ。値段をつけられ、好きに扱わ

れる存在になるのさ」

その言葉とともに、目の前が真っ暗になる。そして、私が外に連れ出される  
ところだというのに、父も母も出て来ず、執事だけが憐みの目をむけていた。

「お嬢様……」

私は震えながら、執事に告げる。

「お父様、お母様に……お元気だと……お伝えください」

「は、はい……」

執事は最後まで涙を流し、私は黒い馬車に乗せられた。屋敷を出る時にチラリと家を見ると、窓際に立つ父母の姿が見えた。

「お父様……お母さま……」

馬車は真つすぐに、奴隷商の競売所にやってきた。地下へ続く石の階段を、私は引きずられるようにして降ろされる。湿った空気。鼻を突く獣と酒の匂い。そして地下室の奥に広がっていたのは、煌びやかな舞踏会場などとは正反対の、薄暗く濁った熱気の渦だ。鏡張りの部屋に通されて、キツイ口調で言われた。

「着替えろ！」

男が見ている前で、着替えねばならないことに抵抗があり体が動かない。

「早くしろ！」

ビクツとして、何とかドレスの紐を解いて服を脱ぐ。だが下着姿になっても、男が追い打ちをかけるように言う。

「全部だ！」

「うう……」

私は震えながら、全てを脱ぎ捨てる。そして、薄くて白い布の服に着替えた。

「よし！」

手枷をはめられた。その部屋の奥から、大勢の人の賑わいが聞こえる。

「本日の目玉はこいつだ！　元・侯爵令嬢だ！」

奴隷商人が声を張り上げた瞬間、男が私をその光の入り口に引っ張っていく。その先には舞台があり、大勢の客が座っている。ざわざわ、と場が波打った。無数の視線が、一斉に私へ突き刺さる。上段の観客席には、豪華な衣服を着た商人や貴族たち。その目は、欲望と侮蔑と好奇が入り混じった色をしていた。

「信じられん……あのエルンスト家の娘が」

「ふん、伯爵令嬢も堕ちればただの牝か」

心ないひそひそ声が、容赦なく耳に届く。私は薄布一枚の衣装をまとわされ、舞台に立たされた。わざと肌が透けるような布地。腕には鎖が絡みつき、自由はない。羞恥で胸が張り裂けそうだった。必死に顔を伏せようとしたが、奴隷商が顎を持ち上げる。

「おい、顔を隠すな！ 見世物だろうが！」

喉の奥で悲鳴が詰まった。舞踏会で浴びた冷笑とは違う、もっと獣じみた値踏みの視線。ここにいる誰もが、私を商品としか見ていない。

「いい女だな」

「苦勞も知らねえ顔して」

「ああなつては、おしまいね」

もう……終わりだ。そう思った。

「さあ、入札を始めよう。いくらだ？」

会場に木槌の音が響いた瞬間、私の運命が競りにかけられた。

「金貨、百五十万！」

「金貨、二百！」

貴族や商人たちの声が、私の耳に重くのしかかる。誰も助けてはくれない。私はただ薄布に包まれ、冷たい鎖に縛られ、まるで玩具のように値踏みされる。胸の奥が凍りつき、全身が震えた。

「二百五十万！」

「三百！」

金額が上がるたびに、羞恥と恐怖が混ざり合い、吐きそうになる。

そのとき……、場の空気が一変した。



低く、冷たい声が響く。

「……一千万」

ざわめきが止む。誰もが声の主を振り返った。漆黒のマントを羽織った男が、ゆっくりと歩いてくる。会場の喧騒の中、彼だけが異質な静寂をまといている。

「公爵様だ……」

「恐怖公爵……」

彼は、噂に聞いた恐怖公爵。その名を聞くだけで、誰も逆らえないという男。見たのは初めてだが、噂はよく耳にする。

敵兵にも、国内の邪魔になる者にも容赦せず、徹底的に叩き潰すという逸話。

「……やつと見つけた」

彼の声は低く、鋭く、そして私を捉えて離さない。

「この娘は、俺がいただく」

その一言で、入札会場のざわめきは消えた。誰も声を出せず、木槌も止まる。恐怖公爵の眼の前では、誰も抗えない。私はそのまま、彼の前に引き出される。震える足で歩きながら、冷たい視線を受け止めた。しかしそれと同時にどこか、抗えない吸引力のようなものを感じていた。

「お前の一生は、俺のものだ」

美しい衣装に装飾品、少し野性味のある引き締まった顔。どこか色気を纏う、美形の男性が私に言う。

「いいな？」

その瞬間、逃げ場は完全になくなった。羞恥と恐怖が入り混じる震えの中で、私の運命は完全に恐怖公爵の掌の上に落ちたのだった。

## 第一章 屈服と快樂の始まり

馬車をおり重厚な扉が静かに閉じられると、外界の光と音は一切遮断された。私は豪華な部屋の中央に立たされ、手首の鎖は繋がれたまま冷たい光を放つ。天井から吊るされたシャンデリアの光は暖かいのに、私の心は凍りついていた。

「……ここが、お屋敷……？」

震える声でつぶやく。それほど立派で、豪華な屋敷。公爵は、静かに部屋の奥から私を見下ろす。その漆黒の瞳は冷たく、どこか計り知れない深さがある。

「ここがお前の居場所だ」

言葉は淡々としているのに、胸に刺さる。恐怖で息が詰まり、全身が固まる。こちらに歩み寄る公爵の指先が、ゆっくり私の肩に触れたとき、震えが走った。

逃げ場は、どこにもない。

公爵は、私の髪をそつと撫で、首筋にするりと指先を滑らせる。その感触に、背筋がぞくりとした。羞恥と恐怖が入り混じり、心臓は破裂しそうに鐘を打つ。

「お前は、俺のものだと、理解しているな？」

首を横に振りたくても、声は震えて出てこない。ただ静かに、深く息を吸い、

震える体を抑えるしかなかった。手首の鎖の重みと肌に触れる公爵の冷たい指、逃げられない絶望感。これが、私の新しい日常になるのだと、理解させられる。

体をこわばらせ、一步後ろに下がる。

ガシャ。

「来い」

部屋を出て、奥の部屋に連れていかれた。ベッドの前に、私は立たされる。鎖に繋がれて、逃げられないことはわかっている。心臓は早鐘のように打ち、汗が背中を伝う。

私は……恐怖公爵の慰みものになる。奴隷と言うのはそういうものだ。

公爵が静かに低く囁く。

「外してやる」

手枷を外され、手を振り解こうとしてしまうが、強い力で腕を抑えられた。

「抵抗しても無駄だ。ベッドに入れ」

そう言って私を押し、とても大きく豪華で丈夫そうなベッドに座らせる。

「そうだ。大人しくしている」

彼は私の腕をとり、スツと両手首にベルトを賭けた。布一枚の私の手首に、革の紐を手際よく結び、それをベッドの四隅に固定する。息を呑む暇もなく、私はゆっくりと、確実に自由を奪われていく。

「お前の手足は、こんなにも細いのか……」

冷たい声が耳元で響く。羞恥で顔が熱くなる。全身を晒され、自由を奪われ、無力に縛られる感覚。それは、恐怖と興奮が入り混じった異様な感覚だった。

「い、いや……」



恐ろしかった。私は、男の人の前で裸になった事すらない。奴隷商人の前で、服を脱ぐだけでも凄く抵抗があった。それなのに、薄い布一枚で縛られている。ぶるぶると手が震えて、ただ恐怖公爵のなすがままになっている。

「怖いのか？」

そう言われて、恐怖を感じ必死に抵抗しようとした。もがき、身体をよじる。だが革の紐は固く、動けば動くほど締まる。その感触に、全身が震える。

「直ぐに怖くなどなくなる」

ふと……至近距離でじっくり顔を見てみれば、とても美しい顔をしている。

こんなに美しい男の人の顔を見るのは初めて、長い髪もつやつやで美しい。

「いいか、これがこれからの、お前の日常だ」

分っている……奴隷商で売られた女なんて、愛玩用にしかない。

泣きそうだったが、なぜか涙は出なかった。たぶん、貴族としての矜持が、まだ私に残っていたのかもしれない。公爵はベッドの端に座り、縛りつけた私を見る。鎖と紐に縛られ逃げ場のない状況に置かれ、唇を噛んで震えるばかり。もう完全に、私の人生の全ての自由は奪われたのだ。

「いい顔をしている。お前は、綺麗だな」

少し驚く。まさかここで、褒められるとは思っていなかった。まだ人間らしく扱ってくれているのだと思い、淡い期待が胸をよぎる。

「い、いえ……」

それでもベッドに縛られたままの私は、全身の力を抜けずにただ震えていた。公爵がそつと近づく。低く響く声が耳元に届く。

「怖がらなくていい……でも、抗うな」

言葉と同時に顎をもたれて、彼の唇が私の唇を塞いだ。強引なキス。甘くて、どこか冷たい感触が全身を貫く。息が詰まり、思わず体が縮む。唇を離すと、

彼の指先がそつと首筋をなぞった。冷たい指の感触に、背筋がぞくりとする。抗おうとするたびに、胸の奥が熱を帯び、心臓が破裂しそうに早鐘を打つ。

すると次の瞬間、私の着ていた薄布がビリビリと破かれる。

「いや！」

「均整のとれた、とても美しい体だ。何かやっていたか？」

「け、剣術を少ししたしなみました」

「いいぞ。引き締まった良い体だ」

そして彼は何かの器具を手に取り、乳首に手が伸びた。

「抗うなよ」

言われても、拘束されてるので逃げる事は出来ない。小さな乳首クリップが、敏感な私に冷たく挟み込まれる。痛みと刺激が混ざり、思わず声が漏れた。

「……んっ……や、やめっ……!!」

抗う声も届かず、公爵様の目が空いている方の乳首をじっと見ている。

「どうだ？ こっちは痛いかな？」

「は、……い」

「じゃあ片方は、うんと可愛がってやろう」

公爵様の舌先が乳首をなぞり、舐め上げてくる。羞恥と快感が同時に襲い、体中が熱を帯びていく。私の小さな抵抗は、羞恥の波に押し流された。

「……こうして、俺のものになっていくんだ」

痛みのある乳首とは正反対に、湿った公爵様の舌がくすぐった。

くりゅ  
♡

「んふう」

「そうだ。素直になれ」

低く囁かれるその言葉に、胸の奥がぎゅっと締め付けられる。恐怖より体が正直に反応してしまうことが、何より屈辱だった。全身が震え、息は荒くなる。

いや……私は……興奮しているのだろうか？

よくわからない感情だった。羞恥と快感の渦に、私は完全に支配されていた。舌で乳首を弄られ首筋を舐められるたびに、怖いのになぜか体中が熱を帯びる。息は荒く、全身の力が抜けそうだった。乳首クリップだけが、ピリピリと痛む。

「ここまできたら、我慢は無駄だぞ」

公爵様の低い声が耳元で響く。そのまま手が下半身に滑り込んできた。

くちゅう♡

「あっ！」

硬い指先が、敏感な部分を探りあててくる。

「ん？　ぬるぬるじゃないか。感じているのか？」

「……いやっ……や、やめ……」

「やめはせん」



抗おうとする声は掠れ、体は逃げ場を求めてもがくが、公爵は容赦しない。  
その指はこりこりと、私の敏感な所を知っているかのように弾いた。

びくん！

「ああ！　そこは！　んんー！」

指でクリトリスを弾かれるたびに、体がおもちゃのようにびくびくいった。

「この肉芽がいいのか？」

「だめえ。よくないですう」

「ふふ。いいのか……そうか」

公爵は笑う。そして、私のクリトリスを重点的にくりくりし始めた。

「あっ♡ あふう♡ んなっ♡♡ だめ♡」

ぞくぞくぞくう……。

「ふふっ。肉芽がふくれてきたぞ。どうしてだ？ 言ってみろ」

なんで……と言われても、それは断続的な刺激のせい。クリトリスを弾かれる度に、びくびくと勝手に体が動いて反応する。

「分んな……勝手に……あう！」

蜜壺の奥から、熱が上がって来た。

じゅくっ  
♡

「うあ  
♡」

「そうか。ここが好きか、ならしつかりと揉んでやろう」

公爵は私のクリトリスをつまむと、弄ぶようにもみほぐし始めた。

「クリ、ひ、ひっぱらない……でえ……」

「そんな、だらしない顔で言われてもな……」

公爵は、確実に私の快感の中心を責め、逃げ場を封じるように押さえつけた。心の中で小さく抵抗する私だったが、クリトリスの快感に飲み込まれはじめる。クリトリスを弾かれる度に、体の奥からどくどくと熱が沸き上がった。

びびん！　びびびん！

「ああ！　だめえ♡　びくびくするからあ！」

初めての感覚。こんなにも、体が正直に反応してしまうなんて。

「いいか、これはお前の義務だ」

「ぎ、ぎ……む？」

「そうだ、これからお前は、俺に可愛がられるという義務がある」

囁かれる言葉に、クリトリスの快楽がさらに絡む。快感が全身を駆け巡り、呼吸もままならず、私は声を上げるしかなかった。

くりゅっくりゅっくりゅっ。

「あっ……あっ……あっ……！」

ダメだった、クリトリスを揉みしだかれるとそのまま、声が連続して出る。逃げ場のないベッドの上で縛られ、全身が震えて言う事を聞かない。